

第5回九州山地カモシカ特別調査の報告

平成30(2018)年度と令和元(2019)年度の2年間にわたって、第5回九州山地カモシカ特別調査が実施されましたので、その結果を簡単に報告します。なお、現地調査においては、本研究会の多くのメンバーの方にご参加いただきました。お礼申し上げます。

特別調査は、ほぼ8年ごとに全国のカモシカ生息地で実施されています。九州での第4回特別調査は2011年～2012年にかけて行われました。今回の特別調査は大分県、熊本県、宮崎県3県が同時に行い、報告書は3県が合同で作成しました。

【調査方法】

調査は、調査隊が、カモシカが生息していると思われる山塊に出かけ、そこで方形区(調査員一人が5m幅を探索するので、5m×調査距離に調査人数を掛けた面積となる)を設置して、その中でカモシカの糞塊数を数えるという方法で行われます。糞塊密度からカモシカ密度を推定する方法は、糞塊法と呼ばれます。全国のうち九州山地と四国山地はこの方法による調査が行われています。また、方形区調査が行われた場所については、植物班による詳細な植生調査も行われました。また、糞はDNA分析でカモシカの糞かシカの糞かが判定されます。

今回から初めて、センサーカメラによる撮影による調査方法が採用されました。センサーカメラによる撮影ではカモシカ密度は推定できませんが、その地域にカモシカが生息しているかどうか判定できます。生息数の推定にはこの結果も活用されました。

【調査結果】

図1に第2回から今回の特別調査までの九州3県の推定生息数を示しました。第2回調査時には多く見積もって2200頭近くのカモシカの生息数でしたが、その後急激に減少し、さらに今回は最低のほぼ200頭と

いう推定生息数になってしまいました。前回(第4回)の推定数が約800頭でしたので、前回からわずか8年間で、1/4近くに減少してしまったことになります。減少の最も大きな要因は、シカによる林内の下層植生の破壊だと思われます。草本層は2000年頃に急激に衰退しましたが、今回はそれに輪をかけるように、灌木層の植生も大きく破壊されていました。すなわち、現在カモシカの餌となる植物がほとんど林内にないため、カモシカが生きていけないようになっているのだと考えられます。

もう一つの大きな変化は、高標高地(祖母、傾、大崩山系等)ではカモシカがほとんど棲んでいなくて、多少密度高く生息しているのは、中標高地(400m～800m)だという傾向も明らかになりました。高標高地では、下層植生のシカによる食害がより深刻となっているからだと思われます。

他に、カモシカにとっての厳しい状況は、シカを捕獲するためのくくりわなによる錯誤捕獲、シカの食害を防ぐために設置された防鹿柵への絡み事故による死亡、疥癬による死亡等などがあります。今後、抜本的な方策を九州3県が協力して採っていかない限り、九州におけるカモシカは近い将来に絶滅してしまう可能性が高いという、危機感を大いに募らせる結果となりました。

岩本 俊孝

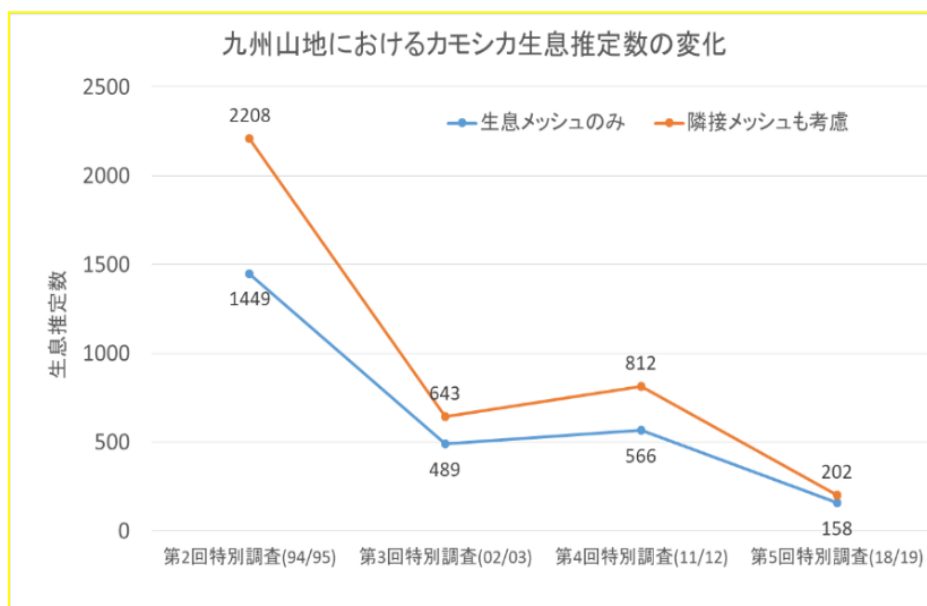


図1 カモシカ生息推定数の変化